秦野の縄文時代

新東名高速道路建設に伴う発掘調査では、様々な調査成果が各地で明らかにされています。今回は「秦野市内の縄文時代」にスポットをあて、特に話題の大きかった稲荷木遺跡と菩提横手遺跡について、新たにわかったことを中心にまとめてみました！！

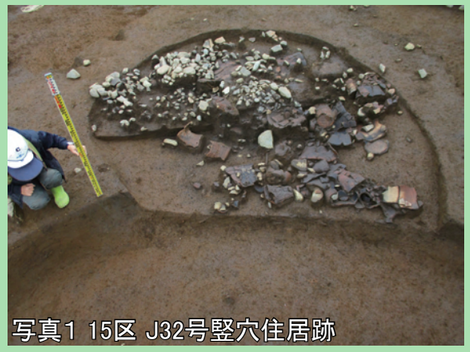


写真1 15区 J32号竪穴住居跡

写真2 15区 J32号住居跡土器の出土状況

●住居検出状況

遺構確認面では拳大の礫に覆われるよう住居跡の範囲が浮かび上がってきました。西側は中期後半の住居跡と重複しており、一部が失われています。

●遺物出土状況

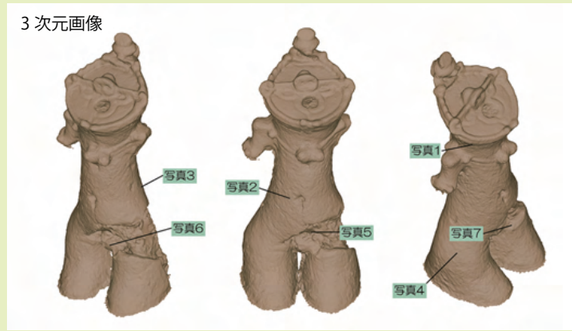
住居がある程度埋没した後に、土器と礫が折り重なるよう時間差を持ちながら交互に入れられて、複雑な様相を示しています。

●土器出土状況

住居中央部には石囲い埋甕炉が設置され、その上面にこれら土器や礫が入れられている状況が明らかとなりました。土器の時期は若干前後の型式が見られますがその主体は勝坂式（新道式土器の段階）で、まとまりを持った出土状況として極めて良好な資料と言えます。

ほとんどの土器は床面からやや浮いた状態で発見されています。横倒しでつぶれた状態のものが大半ですが、中央から出土した土器の一部は逆さまの状態（逆位）のものが認められました。

※神奈川県教育委員会所蔵



本誌№30 号でも紹介しました右の画像は、菩提横手遺跡出土から出土した大形中空土偶の３次元画像です。近年ではこのような３次元モデルが、専門家でなくとも比較的簡単に作成することが出来るようになりました。まさに、新たな”視点”が得られたと言えます。通常、土偶は考古資料として扱われますが、優れた美術工芸品として鑑賞の対象にもなり得ます。３次元モデルという視点も加わったことで、あらためて「考古資料を分析的に観察するとはどのようなものなのか。」この土偶を”解剖”していきます。

【中期の住居の様子】

稲荷木遺跡写真１・２は、縄文時代中期中葉の竪穴住居から約 40 個体の土器がまとまって出土している状況を撮影したものです。住居の廃絶後に土がやや埋まった状態の時に土器が入れられていることが判ります。住居覆土中から多くの土器が出土することはありますが、縄文中期中葉の勝坂式と呼ばれ同一時期のものであること、ほとんどが深鉢形土器であること、遺存状態が極めて良好で、いずれもほぼ完形に復元できるものであることなど、特筆される事例です。土器がまとまって出土する理由は明らかではありませんが、使用した土器や礫を廃絶された住居跡の埋没過程にある窪地に入れた状況です。集落で何らかの祭祀が行われ、使った土器が廃屋に納められたとも考えられます。

稲荷木遺跡 2016～2021 E1A 新東名

稲荷木遺跡

~Inarigi site~

【後期の住居の様子】

写真３～５は、縄文時代後期前葉の柄鏡形（敷石）住居跡で、覆土中に焼土や炭化材が顕著に認められたことから焼失住居と考えられるものです。焼失とその後の埋没過程で通常では痕跡として残りにくい柱材など、床下構造を把握する手がかりになる炭化材が良好な状態で出土しています。

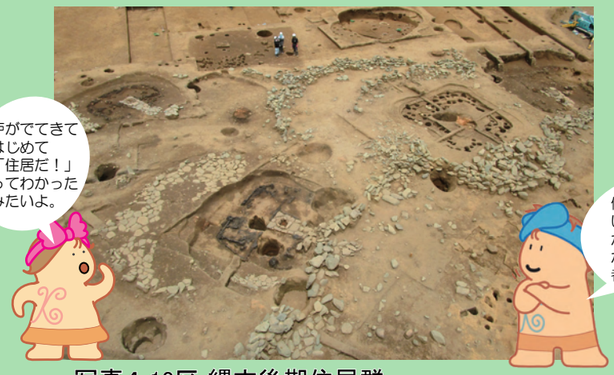


写真4 18区 縄文後期住居群

縄文後期前葉の住居は、床面に扁平な礫を敷並べ、入口部が張り出す柄鏡形（敷石）住居跡です。同じような場所に重なるようにつくられ、複雑な重複関係を有しています。住居の周囲には河原石を並べた周堤礫が弧状に巡ります。入口周辺部分から伸びる列石は隣接する住居と接続しています。

写真3

写真5 18区J31号住居跡　炭化材出土状況

住居中央部の石囲い炉から入口部に向かって敷石を配しています。入口部付近では礫の列が重なっていることから住居廃絶後にその上を覆うように列石がつくられていることが判ります。住居の床面には直線的な炭化材が住居内を区画するよう出土しています。

菩提横手遺跡 2016～2018・継続中 E1A 新東名

菩提横手遺跡

~ Bodaiyokote site~

頭部の接合痕 中央から斜めに延びている細い亀裂（破線部）が頭部と胴部を接合した痕（接合痕）です。各部分の割れ口の角はシャープで摩滅した様子は見られません。出土した時は接合した状態でしたが、取り上げ時に外れてしまいました。

胴部中央付近の亀裂 胴部の縦の中心線（正中線）とこれに接続するように斜めの亀裂（接合痕；破線部）が、胴部の表裏面の同じ場所に走っています。腰部にも接合痕が見られます。正中線を軸線として平行四辺形の粘土板を繋げて形作られている様子がうかがえます。

右脚の外面 縦および横方向に接合痕やヒビがみられます。右脚から右腰部は、頭部や胴部とは分離して出土しました。

右脚の内面 内面の様子を股の方向から腰に向かって見ています。上端部・縦の断面部が粘土板の接合面です。写真右側のパーツ（粘土板）をよく見ると幅 10 ㎜ほどの粘土紐を３本貼り合わせて作られているのが分かります。

左脚の付け根 表面がガサガサ荒れている部分が接合部です。胴部と脚部を別々に作り、この部分で合体させたようです。土偶の内部は空洞ですが、この製作工程時には内面に手指が届かず、丁寧に各部を密着させることができなかったことが分かります。左脚部はこの部分から外れています。また、左腰部の破片は見つかっていません。

左足の内面 横方向に粘土表面をなでた時にできた平行に走る細かい線状の痕や粘土がヨレた状態がみられます。脚の付け根部と同様、整形のために手指を動かせる十分な空間がなかったものと思われます。そのため接合部が痕跡として残っています。この作業を行った時点では粘土表面は水分を含んで柔らかく、あまり乾燥していなかったようです。

このような観察からは土偶がどのような方法や手順で製作されたのかがよく分かります。また、製作方法に起因する破損しやすい部位があることも推測されます。これらのことと、土偶が遺跡からどのような状態で出土したのかということを合わせて検討することによって、土偶の終（しま）い方（かた）について理解が深まるものと考えられます。